

中学校美術部の活動におけるインクルーシブ教育の可能性
—被災地における美術部×地域×アーティストによるアートプロジェクトの実践—

梶原千恵・茂木一司

群馬大学教育実践研究 別刷

第36号 73～80頁 2019

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

中学校美術部の活動におけるインクルーシブ教育の可能性 —被災地における美術部×地域×アーティストによるアートプロジェクトの実践—

*梶原千恵・**茂木一司

*群馬大学大学院

**群馬大学教育学部

Possibility of inclusive education in the activities of junior high school art club
—Practices of art project by Art club, Local Community, Artists in the afflicted area—

*Chie KAJIWARA, **Kazugi MOGI

*The Graduate School of Gunma University

**Faculty of Education, Gunma University

キーワード：インクルーシブ教育、震災支援、アートプロジェクト、中学校美術部

Keywords : Inclusive Education, Disaster Relief Activities, Art Project,

Art Club Activities of Junior High School

(2018年10月31日受理)

1. はじめに

震災はその社会が置かれた状況を改めて浮き彫りにすると一般的に言われる。2011年の東日本大震災では地域の障害者の生活基盤の脆弱さ、社会的インフラストラクチャーの整備の欠陥、地域コミュニティの形成力不足などの課題が顕在化した。震災から7年の年月を経てどれほどの課題が解決の方向へ向かったのか。震災後に問題提起された社会課題も記憶の風化と共に忘れ去られようとしている。当時支援のために実施された多くのアートプロジェクトも検証されないままである。閉塞化し硬直化した日本社会において、当事者の自己検証・自己更新はもっとも必要なことと考え、アートが(共生)社会にできることを自己の実践の省察を通して考えたい。

本稿は、宮城県石巻市立門脇中学校美術部を対象に行われたアートプロジェクトで起こったインクルーシブ教育的な出来事を分析・考察し、その成果を明らか

にするものである。概説すると、これらのプロジェクトを通して、学校生活に困難をもつ生徒のコミュニケーションに変化がみられた。特に大きく変化の見られた生徒を抽出し、行動の変容を分析する。それらを通して震災後の被災地で行われた、いわゆる地域アートプロジェクトが生徒・教師・地域住民など関わった人々にもたらした効果と課題について検証を試みる。なお、各プロジェクトは以下の5団体(ハーマンミラー社^{*1}、日和アートセンター^{*2}、特定非営利活動法人ジェン(JEN)^{*3}、かどのわき町内会^{*4}、カリタス石巻ボランティアベース^{*5})との協働によるものである。

2. 研究の背景

震災後2011年3月～2018年3月まで宮城県石巻市・牡鹿郡女川町を拠点として、筆者は小中高生・地域住民を対象としたアートプロジェクトを企画・実践し

てきた。筆者の実践では、後述する「表札プロジェクト」をきっかけにさまざまなプロジェクトが展開された。本稿では、最初のハーマンミラー社の支援による石巻市立門脇中学校美術部「部活動プロジェクト」(2012. 4～2014. 3)を考察する。

筆者が震災後(2011～2018)に学校・地域との協働で企画したプロジェクトを時期、内容、主体・対象者・協働者の観点から整理すると以下の通りである。

表1 自分のアートプロジェクトの属性の分類(2011～2018)

名称	時期	内容	①主体 ②対象 ③協働者
表札プロジェクト	2011. 05～08 (他団体の活動は2012. 03)	仮設住民に手作り表札を届ける。	①高校生 ②仮設住民
部活動プロジェクト	2012. 04～2014. 03	地域課題をテーマに壁画、顔出し看板などの制作。	①中学生 ②地域住民 ③NPO団体、アーティスト、保護者
遠足プロジェクト	2012. 03～2014. 03 (国内展示のみ海外は継続中)	支援物資として使われなかったランドセルをアーティストが作品に作り替え、展示巡回とイベント。	①アーティスト ②一般 ③国内外のアーティスト、ギャラリ、美術館等
地域プロジェクト	2012. 05～08 2013～2018. 03 不定期	地域住民による地域住民を対象とした造形ワークショップ。アーティストインレジデンスやイベント。	①地域ボランティア ②地域住民 ③地域住民

2-1. 動機としての「表札プロジェクト」

筆者は2011年、石巻市・東松島市内の高校生と実施した震災支援のための「表札プロジェクト」*⁶の企画・実践がきっかけでアートプロジェクトの教育効果を再認識し、中学校の美術の授業や部活動でアートプロジェクトを行うようになった。

「表札プロジェクト」とは美術の授業で高校生が表札を作り、商店街で展示し、展示後に高校生が仮設住宅の住民に表札を届けるという内容である。仮設住宅は周知のように色のない規格化された建物で、暗い雰囲気だった。同じ形状の建物であるため見分けがつか

ず、高齢者が敷地内で迷うという問題が起きていた。筆者は「環境における色彩の学習や色彩が与える被災者の心の癒し」を目的とし、本プログラムを企画した。当時非常勤講師で指導していた宮城県石巻好文館高校1～3年生、宮城県石巻西高校3年生の約100名を対象に選択美術の授業6時間で制作した。期間は、制作が5月下旬から1ヶ月間、展示が6月の2週間、仮設住宅の訪問は7月であった。2011年の現地の状況を振り返ると、4月に仮設住宅の建設が開始、5月に高校の授業再開であったので、被災後比較的早い段階で行われたプロジェクトである。

プロジェクトを通して、生徒の「主体性を引き出し、新たなコミュニティを創出する」という「美術(教育)の力」を再確認できた。選択美術の授業は、消極的に美術を選択している生徒が半数で、生徒の主体性を引き出すことが課題であった。アートプロジェクトという取組のよさは生徒各々がやりたいと思って取り組んでいること、そして震災という特殊な状況が生み出した「被災者の癒し」「仮設住宅の美化」という(通常は曖昧である)美術教育における目的の明確化である。プロジェクト時の生徒の様子を振り返ると、「どんな工夫をしたら喜んでもらえるか」について、教師や友達に相談する姿が多く見られた。彼らはプロジェクトを体験し、他者と向き合うことによって、自己承認ができた。

しかしながら課題も多く残った。阪神淡路大震災でもみられたように、いわゆるPTSDのようなことへの配慮にまで手が回らなかった筆者のマネジメントの問題や、アート/プロジェクトには正負両方の部分があることを考慮すべきということなどである。例えば、表札を届けた生徒はプロジェクト後のインタビューで、

「表札を届けたら仮設住宅の人は喜んでくれると思っていた。でも、実際はドアをノックしても部屋から出て来ない人や、表札を受け取らない人もいてショックだった。その時初めて震災の深刻さを知った。」

と答えている。見方によっては震災のリアリティを生徒に伝えることができたと評価もできるが、被災している生徒の心に傷を残したことは確かである。事前に予測できなかった筆者のコーディネート不足である。この「表札プロジェクト」の評価については別稿で詳しく検証したい。

2-2. 先行事例

中学校教員によるアートプロジェクトは、全国的にアートプロジェクトが盛んになる90年代から始まる。村上タカシ（当時杉並区和泉中学校教諭、現宮城教育大学教授）の「IZUMIWAKUプロジェクト」*⁷（1994、1996）、四宮敏行（当時名古屋市立千種台中学校教諭）の「学校が美術館」*⁸（1998、2000）が先駆的事例である。上記のプロジェクトは休日の学校に現代美術作品を展示するもので、アートプロジェクトを通して中学生にアートを身近に感じさせることが目的であった。また、「学校が美術館」では生徒が企画運営に関わったことが特徴である。それらを発展させ、より生徒が主体的にアートと関われる仕組みを作ったのが中平千尋（2013年当時長野市立櫻ヶ岡中学校、2014年没）の「とがびアートプロジェクト（以下、とがび）」*⁹（2004～2013）である。中平自身の分類によれば、「とがび」は生徒のコミュニケーション能力と主体性の育成を目指し10年間継続された。「借り物アート期」「キッズ学芸員覚醒期」「とがび解体期」「脱アーティスト期」の4期からなり、最終的には生徒自身が現代芸術的な作品を作り出した点は類例のない希有な優れた事例である。

一方、東日本大震災後の東北の学校で行われたプロジェクトでは、宮崎敏明（当時東松島市宮戸小学校教諭、現東松島市立宮野森小学校教諭）による「東松島（宮戸）復興プロジェクト・チルドレン」*¹⁰がある。宮崎は、子どものPTSDの癒しに造形活動を取り入れ、「未来の自分、地域」を協働で描かせる授業や、地域の自然環境や風習の学習にVRを活用する授業を7年間行っている。また、2004年スマトラ沖地震で甚大な被害があったインドネシア・アチェ州の子どもたちの造形を通じた交流を継続して行うなど、活動が継続・発展している点が特徴である。

学校と地域をアートで結ぶプロジェクトの初期では村上・四宮から教員主体で取り組まれ、その後中平が生徒主体に大きく舵を切ったことがわかる。しかし、取り組みの少なさやそれにかかる労力や資金などから、簡単にできるものでないことが理解できる。しかしながら、筆者は社会が今後の共生社会に向けて、アートが重要な役割を果たすべきだと考え、アートプロジェクトの実践によって、生きにくさを抱えた人を含めて全員が参加できる社会・コミュニティの構築を

模索したいと考えた。ここでは、コミュニケーション障害を持つ生徒の参加による生徒・教師・関係者全体への波及効果を検証したい。

3. 4つのアートプロジェクトによる教育実践

ここでは、「部活動プロジェクト」による対象生徒に関する起こった出来事を詳述し、その成果と課題を明らかにしていきたい。

その際、(1) 地域文化の体験、(2) 多様な人々との協働、(3) 生徒の取捨・判断場面の重視などを意識して、プログラムを組み立てた。それらは、生徒の①美術や地域への関心、②コミュニケーション能力、③主体性の育成にどのような効果をもたらしたかの検証となる。分析方法は、筆者と連携団体による写真・文章の記録、生徒のワークシートを用いた。

最初に、生徒の実態について述べる。生徒Aの特徴は以下のようなものである。

生徒A：普通学級3年生女子。場面緘黙症*¹¹。小学校3年以来学校では話していない。自宅で話す事はできる。

美術部は約8名が在籍し、活動としては、漫画やイラストの模写など、個人で絵を描く事が多く、生徒同士のコミュニケーションはあまりない状態であった。活動時間は基本的に平日の放課後の1時間30分程度、土日祝日は3～6時間程度であった。対象生徒は美術部の中でコミュニケーションが取れないために他の部員との間に壁ができていた。

3-1. 生徒Aの変化—ハーマンミラー社「東北復興プロジェクト」を通して—

生徒Aが体験した2つのアートプロジェクトを分析・記述する。生徒Aは当時中学校3年生で下記の2つの実践に参加した。

実践1 〈ISHINOMAKI STOOL〉において

・概要：本企画は2012年から同社が行う「東北復興プロジェクト」の一環である。筆者と同社の関係は、2011年に同社が仮設住宅を視察した際に筆者がコーディネーターを務め、2012年宮城県石巻好文館高校と宮城県石巻西高校で同社デザイナーが授業を行うなど継続的な交流による。

表1-1 「ISHINOMAKI STOOL」における生徒Aの様子

時間	○生徒A／△講師／・活動の説明／*筆者	実施の状況
13:00	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介・工房内の案内企画内容の説明・生徒と講師のペア作り △「暑いからジャージを脱いだら」 ○(無反応) 	 <p>参加生徒（石巻工房前）</p>
13:30	<ul style="list-style-type: none"> ・材料と道具の扱いの説明 ○(話を聞いている) △「電動ドライバーを使ってみる？」 ○(首を横に振る。)*拒絶の意味 △「じゃあ材料を押さえてください。」 ○(講師がドライバーを使う間、しっかりと材料を押さえている) 	
14:00	<ul style="list-style-type: none"> ・講師と生徒の距離が近づく。 ○(電動ドライバーを使用し始める。) △「そう、そう。その調子。」 	 <p>作業全体の様子</p>
14:30	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒Aのスツール完成間際に組合せに誤りがあることが分かり、分解し再度組み立てる。 △「ごめんね。」 ○(無言で作業している。) 	
15:00	<ul style="list-style-type: none"> ・スツールの完成 △「完成したスツールと一緒に写真を撮りましょう。」 ○(首を横に振る。)*拒絶の意味 	 <p>ドライバーを使用する生徒A</p>
15:30	<ul style="list-style-type: none"> ・作品の裏に生徒の氏名と商店街へのメッセージを書く。 ○(顔が上気している。) *「丁寧に作業していたね。」「せっかくだから写真を撮ろうか？」 ○(無言でスツールをもって外に移動) ・完成したスツールと一緒に写真撮影。 ○(顔が上気している。) *「楽しかった？」 ○(無言でうなづく) 	

内容はプレカットしたレッドシダー2×4を電動ドライバーで組み立てスツールを作る。講師と生徒がペアになり2時間で1つのスツールを制作。完成したスツールは、裏面に制作者名と石巻へのメッセージを書き商店街に寄贈した。




- ・目的：商店街ににぎわいを取り戻す。
- ・講師：ハーマンミラー社・石巻工房スタッフ
- ・参加生徒：6名（生徒A含む）
- ・場所：石巻工房

- ・実施日：2013年7月21日（土）13:00-15:00
- ・活動の様子：表1-1

実践2 〈Design the Life You Love〉において

- ・概要：デザインシンキングを用いて「自分の事や将来の自分を」を見つめ直し、考えを深める。対話、イラスト、文章を用いる。
- ・目的：被災した生徒の心の癒し。
- ・講師：アイシャ・バーゼル

表1-2 「Design the Life You Love」における生徒Aの様子

時間	○生徒A／△講師／□他生徒／・活動の説明*筆者	実施の状況
10:00	<ul style="list-style-type: none"> ・飲み物やお菓子の配布 △「リラックスしてやりましょう。」 ・講師自己紹介 ・生徒2人でペアをつくる。 ・2人で自己紹介し合う。 ・生徒他者紹介 	
10:30	<ul style="list-style-type: none"> □「Aさんは絵が得意です。」 ○「……部長。」(*ペアの相手が美術部の部長だった。) 	<p style="text-align: center;">講師と生徒の対話</p>
11:00	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きなことや趣味、熱中していること等をイラストや文章で書き出す。 	
11:30	<ul style="list-style-type: none"> ○(テレビドラマのイラストを紹介をする。) △「これは何ですか？」 ○「……」(沈黙) □「テレビだと思います。」 	<p style="text-align: center;">講師の質問に答える生徒A</p>
12:00	<ul style="list-style-type: none"> ・休憩 	
12:30	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の将来の夢を口頭で発表する。 ○「(沈黙数分)澤穂希さんのようになりたいです。」 □「わあ、すごい！」(全体から歓声上がる。) △「すばらしいです。あなたはきっとなれるでしょう。」 ○(赤面) 	
13:00	<ul style="list-style-type: none"> ・全体写真撮影 ・終わりの挨拶 	<p style="text-align: center;">対話する生徒たち</p>

- ・参加生徒：6名(生徒A含む)
- ・場所：石巻市旧商工会議所
- ・実施日：2013年7月29日(日)10:00-13:00
- ・活動の様子：表1-2

実践の中で気づいたこと

実践1〈ISHINOMAKI STOOL〉は、生徒Aにとっては初めての学外での体験で、かなり緊張感が高い様子だった。最後までAが言葉を発することはなかったが、講師との作業はスムーズに行われていた。事前にAのことを講師に説明したわけではないが、発話しないAに対して講師が自然に接していたのがよかった。黙々と作業することを好むAに向けた内容だった。A

は作業を通じて講師とコミュニケーションがとれていた。作業終了後のAの様子から、Aなりに達成感を感じている事が分かる。Aはもともと商業高校に進学を希望していたが、ワークショップ後工業高校進学希望になった。Aの進路変更を後押しした可能性がある。

実践2〈Design the Life You Love〉では対話を中心となるためAが参加できるか危惧したが、内容を説明したところ本人が希望し参加した。ここで大きな出来事があった。Aの小学校3年生以来継続していた緘黙が破られたのだった。沈黙も長く、小さな声であったが、自己開示できたことは大きな出来事であった。同時に自己肯定感も少し高められたのではないかと思われる。Aが話すことができたのは、美術部の他の生

徒がしばしばAを助けたこと、講師が沈黙を厭わない忍耐力をもっていただけたと思われる。学校の授業では時間が限られているため、Aのペースに合わせて待つことはできない。美術部の後輩達はAが自己開示したことで以前よりAに対して親しみをもって接するようになった。

4. 考察

はじめに、生徒Aの変化から見とれる成果について考察する。生徒Aは実践1〈ISHINOMAKI STOOL〉で作業を通して異業種・異分野の人々と非言語コミュニケーションすることができた。また、実践2〈Design the Life You Love〉で発言することができたのは大きな成果である。その後、高校の進路変更するなど、彼女の行動変容のきっかけになった可能性は高い。

Aだけでなく他の部員も含めた美術部全体の主体性やコミュニケーションスキルの高まりもみられた。その様子は、アートプロジェクト後の文化祭展示や美術部の統一ユニフォーム（作業着）の購入などから見て取れた。生徒たちは教師に言われたことをするのではなく自分たちがやりたいことを提案するようになった。

次に、目標のひとつに掲げていた、①地域文化の体験、②多様な人々との協働、③生徒の発想の重視について考えたい。プロジェクトを学校内で終わらせず、地域の商店街で行うことにより、生徒の地域に対する関心を高めることにつながった。生徒によると休日に家族と一緒に商店街に設置された作品を見に行ったという。生徒の手作りの作品を町中に設置することで、地域を訪れるきっかけとなり、地域への愛着を高めることができた。また、生徒の主体性を引き出すために様々な体験をさせることはコミュニケーションの学習には有効だった。

しかしながら、本実践では協働を効果的に実施できなかった。筆者の「協働」の意義の捉えが表層的で協働者であるハーマンミラー社と目標に対する理念の共有などは不十分であった。そのため、プログラム内容が講師まかせになってしまった。今後は、事前の打ち合わせや振り返りが必要である。しかし、多少成果は見られた。中学生が最も印象に残っていると語ったの

は講師との交流である。中学生は様々な職業の大人に出会う経験はあまりない。特に地方ではクリエイティブ関連の職は少ない。インターネットの普及により知識・情報が増えたとは言え、本物のプロフェッショナルに出会う経験には代えがたく貴重である。今後はアーティストや建築家など美術に関わる分野の人々との協働をますます実践していきたい。

アートプロジェクトの実施方法に関しては改善が必要である。特に、参加者に考えさせ、気づきをもたらすような構成にしないと、アートがその場限りの消費される企画で終わってしまう。また、振り返りを十分に行わなかったことも問題であった。実施する活動が単発であった場合でも、長期的にアートプロジェクトに参加した場合でも、学習環境の場でどのような行動変容が見られるかは全体を包括して、今後研究が必要と考える。

次に、教師・学校への影響（効果）について、述べる。初めは教師主導で始まったアートプロジェクトだが、生徒のやりたいことが明確になるにつれ、教師は生徒のやりたいことを実現するためのアドバイザーとして生徒に関わるように変化していった。美術部の活動が継続するにつれて、担任や管理職も参加するようになった。

しかし、こうした美術部の活動に対する批判もあった。美術部は個人の技術の向上を目指すものであるため、アートプロジェクトは美術部の活動として適していないという内容だった。中学校学習指導要領によると部活動の目標は「学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等」の育成であるが、その解釈は教師によって差があるのが現状である。

最後に、今後の課題であるが、一番は継続性の問題である。本プロジェクトは震災後の被災地ということで外部団体の支援が得やすかった。しかし、定期的にプロジェクトを行っていくには助成金の申請やそれを活用してプロジェクト等を企画・運営していく恒常的な組織の構築が不可欠である。

また、アートプロジェクトのような活動は出来事を写真・動画・文章等で記録し、残し、その教育効果と必要性を訴えていかなければならない。マスメディア対応なども重要であり、定式的なものがないだけに今後の課題と考える。（梶原）

5. おわりに

梶原千恵とはじめて会ったのは、震災支援プロジェクトの「WA WA PROJECT」(3331アーツ千代田、2012. 2～3)の展示だった。黄色いTシャツが目立つ笑顔の女性に引きつけられ、展示を見ると避難所にカラフルな表札を届けるというアートプロジェクトで、筆者のテーマ「美術教育で人を元気にする」という理念に合致しており、とても興味をひかれた。そして、すぐに女川を訪ね、震災の惨状を目の当たりにし、同時に支援の必要性を痛感させられた。その後彼女が中心となって進められたアートプロジェクトの一部に関わったりしながら、現在梶原は自分の美術教育実践をまとめたいという理由で、群馬大学教育学研究科で研究をしている。

梶原千恵の実践は、規則が厳しい、自由がないという理由で、ある意味人生の中で最も厳しい時期である中学校を外に拓き、コミュニケーションの回路をつくり、人を元気にした優れた実践である。生徒は学校で生き残るため、ルールの中でどれだけ失敗しないかを学ぶ。しかし、思春期のもっとも感覚的にも知的にも活発なこの時期に子どもたちが優先的に学ぶべきは、自分とは違う多様な人・もの・こととの異文化な接触・交流とその学習であろう。つまり、他の教科と違いひとり一人に皆違う答えがある美術教育は基本的に「自由」を基礎にして活動を成立している反面、生徒たちは美術学習の場面で、たとえば白い上に線を引く場合など、その都度自分で考え、判断を迫られる。美術教育とは、その継続や反復が身体記憶として身体全体に記憶・蓄積される学習なのである。梶原の模索は意識的無意識的にしろ、そういう意図・意味を持ってはじまった。

アートプロジェクトを美術科教育、つまり中学校教育に持ち込むメリットは、協同・協働とする学習である点である。グループの中の個性は多様性となって補い合い、増幅されて全体を発展・形成していく。この活動は何よりもコミュニケーションの学びにとって重要であり、相手との間合いや調整は前進と妥協の相互作用と確認の繰り返しであり、いわば非日常と日常の往還が生徒の人間性を豊かにし、予測できない未来を生きる上での応用力となるのである。特に、今回は外部に開放された場での実践であり、障害を持つ生徒が

混じっていたために多様性が担保される場が必然的にできあがった。そこでは、障害の有無、立場や年齢、職業を超えて平等な関係性が築かれやすい環境が整い、学校生活で固定化された関係性を再構築することができた。すなわち、学校を外に拓くことによって、閉鎖的な学習空間がインクルーシブで自由なアートな学習の場になったと捉えることができる。たとえば、教師／生徒のようなヒエラルキーがなくなり、全員がフラットな関係で活動できた。この学習の場では、障害があっても自分のできること／得意なことで貢献できるため、同じことだけをしていても許されたのである。

場面緘黙症というコミュニケーションに困難を抱えた生徒Aが学校・教室ではなく、少し外に拓かれることによってゆるやかになった学習環境で、言葉を発することができたことは、学校教育自身をふり返り、教育というものの意味を見直す動機にも成る。美術の持つ、身体／作業活動などの非言語コミュニケーションとしての可能性が示唆されたといってもいい。テキストだけでなく、イメージ等による協働学習は言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションを学びの中で統合する。これは美術の学習の機能であり、役割である。

ただし、協同・協働は良い点ばかりではない。一人で作品を作るよりも手間がかかり、実際はより面倒である。たとえば、積極的な参加が他の生徒たちを排除し、意見を封じ込めたりと、多様性を損なう場合もある。しかしながら、そのような困難なプロセスの経験によって、課題を自分ごととして感じ取れる力を育むことにも可能になる。また、次々に起こる課題と解決のプロセスに生徒が巻き込まれることがコミュニケーション能力の育成につながるのではないかと考える。

梶原は部活動の在り方や意義についても考えている。「部活動は自分にとっては重要だ。現状では、中学校の部活動をめぐり厳しい指導や教員の時間外労働が問題となっている。しかし、外部との接点を持つことや好きなことをやりたい生徒が集中的に物事に取り組める時間を授業等で取ることは難しく、少人数で何度もアートプロジェクトを経験することによって生徒は自己成長をし、それぞれが自分になりたいように熟達していく(あるいは、そのきっかけをつかむ)。よって、明確な目的をもち協力体制が整えれば、部

活動の教育的効果は高いと考える。」とインタビュー(2018.10.1実施)で述べている。

1990年代末から始まる「開かれた学校づくり」は、コミュニティースクール、地域学校協働本部など、一見学校が地域に開かれてきたように見えるが、実際の現場の反応は多忙な教員への負担増になってしまっている場合が多い。それは、(教育制度)システムの変更が共同体を理念から変えようとしていないからであるが、梶原の部活動アートプロジェクトでは、小さく手作りの活動であるが故に、みんなが本当に協同・協働の実現を思いながらできる点でメリットがあった。本事例は、このようなアートを活用したプロジェクトの実践が学校を拓く手段の1つとしておおいに可能性を秘めていることを証左した。特に今回の実践は、所属する管理職や同僚、保護者の協力、地域団体との協働が実現し、学校が拓かれたという点で特に評価できる。

梶原は残された課題についても、「中学校でアートプロジェクトを行う際の運営組織、予算の確保、プロジェクトの継続性である。それらに関してはコーディネーターの存在が不可欠であると考えている。部活動顧問一人だけではアートプロジェクトは難しい。コーディネーターの役割や学校での受け入れに関しては今後の大きな課題だ」と述べる。中間支援組織や実働するプロデューサー、コーディネーター、ファシリテーター等の人材育成も急務だと感じている。現代の教育はそれほど多様になり、難しくなっていることをもって顧慮すべき時代になっている。(茂木)

謝辞

本プロジェクトを企画して下さったハーマンミラージャパン株式会社社長・松崎勉様及びスタッフの皆様、参加してくだ

さった門脇中学校美術部の生徒の皆様、ご協力くださった石巻市立門脇中学校校長・赤間先生、美術部の保護者の皆様に感謝いたします。特に、研究に協力して下さったAさん、Bさんには感謝いたします。

註

- 1) 世界的に有名な家具メーカー。震災後石巻市を拠点に復興支援活動を行った。ハーマンミラー社の東北復興プロジェクトの詳細は<https://hermanmiller-ergokiosk-sendai.jp/herman-miller>
- 2) 2012年3月から2014年7月末まで、宮城県石巻市の中心市街地に開設していた文化芸術拠点。実施主体は「黄金町エリアマネジメントセンター」。
- 3) 1994年設立。世界各地で戦争や紛争、また自然災害の犠牲となった人々への支援活動を行っている。2011年3月より石巻にベースを設置しコミュニティ支援等を行う。
- 4) 震災後に世帯数が激減し新たに門脇地区で新たに結成された町内会。
- 5) 復興支援のため石巻にボランティアベースを設置し、コミュニティ支援等を行う。
- 6) 中村政人 2012「東日本大震災復興支援プロジェクト つくることが生きること」一般社団法人コマンドN、A-062～A067.
- 7) IZUMIWAKU video 1994：学校美術館構想展、リメックス
- 8) 四宮敏行 2002「学校が美術館」美術出版社
- 9) 中平千尋 2014「とがびアート・プロジェクト10年の歴史：とがびアート・プロジェクト第1期：借り物アート期(2001年～2004年) 美術教育学：美術科教育学会誌、35巻 p.369-381.
- 10) 宮崎敏明2014「実践報告：美術による東松島(宮戸)復興プロジェクト・チルドレン」東北芸術文化学会 18号、pp.3-12.
- 11) または選択性緘黙。特定の場面や状況で話せない状態が継続する子どもの行動問題。DSM-5では不安症群カテゴリー。
- 12) 「協働」とは複数の主体が同じ目標を共有しともに活動することである。

(かじわら ちえ・もぎ かずじ)